

若き保育者を育てるために

石 割 陽 子

今年もまた若い保育者たちが巣立っていった。彼女たちは大学やその他の養成機関で、まず基礎理論を学び、次いで保育実習、教育実習を通して子どもと現場の保育者に出会い、それによって学生は、大きな自己変革と成長をとげ、そして巣立ってゆく。

保育者をおくり出す側としては、あれもこれもとつい盛り沢山のカリキュラムで学生を追いたてることになりがちであり、現場におくりだしたあと、どう育ったのかと気にしながらも、アフター・ケアはなかなか思うにまかせない。大学によっては、ゼミや研究会を開き、卒業生が集まって勉強する会を持つたり、また大学の講座を公開して、再び学校で現場の人たちが学べる方法など、アフター・ケアのための努力が夫々に試みられている。

ところで、学生たちは保育に関してどのような展望をもっているのだろうか。それを把握しておくことは、養成校としても、また保育の現場にとっても、決して無駄ではないだろう。

アンケートをもととした調査結果から、未来の保育者たちの保

育への決意や、人生への考え方をみてみよう。

調査の対象は、仙台市にあるキリスト教主義の私立短期大学の保育科二年の学生、五十年代百三十三名、五十一年度百三十二名、計二百六十五名である。調査の時期は十二月で、従って各種の実習は全部経験している。

一 未来への展望

現場に入っていくかとする彼女たちは、まず仕事を何年位続けたいと考えているか。

表1 仕事を何年位続けたいか

希望年限	回答数	%
1～2年	3	1.1
3～4年	40	15.2
5～6年	11	4.2
6年以上	75	28.4
わからない	133	50.4
無 回 答	2	0.8
計	264	

表一のように、できるだけずっと長く続けたいが今はわからないというものが圧倒的に多く、ついで六年以上が二八・四％となっている。六〇％近くの学生は、六年以上、またはずっと続けたいと思っている。

ではこれらの学生は、どのようなことが最も大切であると思っているのか。表二の通りである。なお「その他」の内容としては、人間らしく生きる、人間関係、人と接して心のふれあいの中から学ぶ、女性としての優しさ、思いやり等があげられていた。

また、これからのような生き方をしたいかと問うと、「一瞬一瞬を充実したものに」(六八・九％)、「楽しく」(二五・九％)、「仕事に始どのエネルギーをそそぐ」(四・四％)、「良き伴侶にめぐりあえるように」(三・四％)、「社会に奉仕して」(一・〇％)、「その他」宗教を求め神に従って生きたい、「自分らしくマイペースで」「いつも自分を見失わないよう」(五・七％)等と回答している。

さらに、これからの自分の精神生活に最も大きく影響を及ぼすと思われることは、「仕事の内容」(四二・三％)、「他の人々への愛」(二五・七％)、「はっきりとした思想——教育理念等」(八％)、「その他——自分の周囲の人々の指導、助言、自分の趣味、神に対する信仰と共産主義的思想」(八・七％)となっている。この

表2 最も価値を感じていること

	回答数	%
社会奉仕	50	18.2
書物を読んで論理を構成する	40	14.6
人生に美を見い出す	85	30.9
合理的に生きる(むだなことをしない)	16	5.8
人の上に立って多くの人々を指導する	2	0.7
その他	70	25.5
無回答	12	4.4

辺に未来の保育者のプロフィールの一端がうかがえる。すなわち、若者らしい充実感を持って、仕事と人間にかかわることに、自分の生きがいを見出そうとしているのである。

二 保育への決意

この若い保育者たちは、現場に出るからどのような保育をしたかと考えているのだろうか。「一斉保育(教師中心)と自由保育(幼児中心)を組み合わせて」が八〇・二％、「自由保育を主体に」が一〇・五％、「一斉保育を主体に」が四・一％、「特に考えていない」が八％、「その他」一・五％の順位であった。

どんなことに重点をおいて実践したいかについては、「創造性

を育てる」五三・六％が最も多く、「遊びを中心にして」三九・三％、「知的教育中心」と「その他」が各々二・四％で、「キリスト教主義的」は一・七％であった。

次に「もし、あなたのもっている保育理論が、従来の現場の理論と異なる新しいものであったらどうするか」に対しては、「最初は従来のやり方に耳をかたむけ、次に自分の保育理念や理想をうちだす」六五・七％が最も多く、「現場の先輩たちに相談する」二五・八％、「自分で正しいと思うことをやってみる」五・九％、「多少旧式であっても周囲のやり方にあわせる」一・五％であった。

以上まとめると創造性や遊びを大事にしてゆきたいという態度がみられ、一斉保育と自由保育の組合せを良しとしている。これは、現在多くの幼稚園や保育所にとられている考え方に一致するようである。

現場に出て保育をしていく上で、何か問題があったらどのような処理するかというと、表三に示すように、実践的な面でも理論的な面でも大きく現場に頼っていることがうかがえる。理論的な面では、短大の先生や、研究会、自分で解決等というのが多く、養成校側への期待も僅かに見られる。

今後どのような方法で保育の勉強を続けたいかというところ、「自分

表3 卒業後の保育上の問題の処理方法

	実践的なこと		理論的なこと	
	回答	%	回答	%
同僚にきく	57	17.1	47	13.7
同じ職場の先輩にきく	247	74.0	159	46.2
短大の先生に相談する	0	0	31	9.0
研究会で問題解決する	5	1.5	35	10.2
自分で解決する	22	6.6	57	16.6
その他	2	0.6	4	1.2
無回答	1	0.3	11	3.2

の職場を中心とした研究会などで」(五八・二％)が最も多く、「誰か(先輩、同僚、短大の先生に)相談して」(二二・七％)や「独力で」(一三・一％)やるが続いた。

以上のような結果から、保育への積極的な態度や、職場の先輩や研究会から学ぼうとする姿勢が大きいように見られる。

三 障害児保育について

ここ数年來、東北でも障害児保育の問題が表面化し、市民運動に具体化されてきている。現在、我々の短大でも教育実習のガイダンスの中で、現場の先生においでいただき、お話をしていただ

いたり、仙台市内で有志によって行なわれている障害児のグループに、ボランティアとして学生が参加しお手伝いをしている。これから現場で新たに保育をしようとする学生が障害児の問題をどのように受けとめているかというところ、障害児保育が大きくとりあげられていることを、「望ましい」(四六・五%)、「いいことだ」(二七・九%)、「自分も積極的に協力したい」(二一・六%)、「あまり関心がない」(〇・七%)、「その他」(三%)という結果であった。「その他」の中には、関心はあるがどうしていいかまだわからないといった意見もあった。

次に自分のクラスに知的発達が遅れている子どもがいたらどうするかという問に対して、「積極的に指導したい」(七〇・五%)、「自分のクラスの子どもたちで手がまわらないと思う」(八・九%)、「その他」(一九・二%)が主なもので、その他の中には保育者一年生としては余裕がもてない、余裕が持てるようになったら努力したい等がかなり多く、積極的に入れたいというのではないが、もし自分のクラスに入ってきたら他の子どもと同じように暖かく指導したい、特別な接し方ではなく自然に接したい等という意見もあった。そして、そのような子どもたちがクラス内にいることは、「他の子どもたちに良い影響(いたわり、助けあい)を与えると思う」(五八・一%)、「保育者に人間存在の本質や価

値観を与える」(二六・六%)が多く、「保育者にとって保育計画の実行と進展の妨げになると思う」(二・三%)は僅かにすぎなかった。

以上アンケート調査を中心に、保育の現場に巣立つ直前の保育者たちのプロフィールを描くと、まず職場の先輩を自分のモデルとし、やがては自分の判断でよりよい保育を考えていきたい。そして大いに研究会や自分自身でも学んでいこうとする決意を持っている。障害児保育については全面的に楽観しているわけではなく、積極的にその指導にあたりたいという姿勢がうかがえる。

このように、現場の先生方に期待するところが非常に大きいという現実が明らかであり、我々養成校側としては、現場の先生方との一層の交流をはかり、共に学べる場をつくっていかねばならないと思う。時には一つの大学のみならず、幾つかの大学の先生が協力しあって、夫々の大学の特殊性を生かしながら、夫々得意とする講座を公開し、現場の人たちと学びあえる場があっても良いのではないかと考える。

(尚綱女学院短期大学)